

閻魔大王と仏教の輪廻転生

日本仏教の神話における冥界は、神性閻魔大王により支配されています。人が死ぬと、四十九日の間、閻魔大王が率いる地獄の十王により裁かれます。裁判は、故人が生前に行った行為を基準として、人が生まれ変わる、六道のいずれに入るかが決まります。

地獄の十王は、殺人、窃盗、嘘などを罪として検討し、順に裁きを下します。各王が、三途の川を渡り、冥界に入るところから始まり、橋、浅瀬や蛇が群がる深淵へと、故人の再生のあらゆる側面につきそれぞれ審判を下します。これらは、下層から順に、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天人となります。

苦しみは、程度の差こそあれ、六道のすべてに蔓延しています。例えば、餓鬼は消えることのない空腹に苛まれます。何かを食べようとすると、口の中で食べ物が灰になってしまいます。天界にいる神聖な存在でさえ、過度のプライドに苦しむことがあり、同じ天界に生まれ変わる保証はありません。無限の光と生命をもつ仏陀である、阿弥陀仏信仰によって悟りを開くか立山信仰により浄土に生まれ変わるまで、人はこの生・死・再生のサイクルに囚われています。

立山巡礼は、江戸時代（1603-1867）に救済を得る手段として流行しました。人々は、

立山に登り、自らを浄化するために日本全国からこの地へ旅をしました。巡礼者は山の峰を
浄土の象徴とみなし、巡礼することで阿弥陀仏の世界へ行けると信じていました。

富山県立立山博物館が運営する屋外施設、立山まんだら遊苑では、巡礼体験と仏教の冥
界を巡る魂の旅を再現した光と音の展示があります。立山まんだら遊苑は、閻魔堂から徒歩
10分のところにあります。